

アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 7回目

空想と反逆とエディプスコンプレックス

今回のテーマ

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く←この途中までやってきた

III. 警察官とエディプスコンプレックス

前回までのまとめ

帆高と陽菜が出会い晴れビジネスを展開するまで

『天気の子』の主人公森島帆高は島の生活に息苦しさを感、そこから抜け出すように

東京へと一人逃げ出すように上京した。雨が終日降りしきる東京。そんな中で天気を晴れにできるという「晴れ女」の特殊な能力を持った陽菜と出会う。彼女と行動を共にし、どうしてもその時、その場所だけはスポット的に晴れにしてほしい人に晴れを提供するという「晴れビジネス」というものを展開していく。

森島帆高の突飛な上京はエディプス・コンプレックスからの逃避であるが、一方で陽菜も最近母を亡くし、経済的基盤を失い、弟の凧との子どもだけの生活を強いられているが、その喪失を否認し、明るく生きようとしている。二人は互いにとって希望の光（「ハレ」）の存在となり、このビジネスは表面的には問題解決への取り組みに見えるが、実際には陽菜が母の喪失という根本的な痛みと向き合うことを避け、周囲の期待に応えることで自分の存在価値を確認しようとする、自分自身を犠牲にした適応だったとも言える。

晴れビジネスの限界

その後「晴れ女」の秘密を陽菜は帆高に語る。

陽菜は、母を失うかもしれないという耐え難い現実と直面した時、鳥居（境界）を越えて「死の世界」に片足を踏み入れることで、生者として感じるべき痛みから逃れ、「感情的な死」を選んだとも言える。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、天気を支配することで、**外界の全能的コントロール**を試みている。これは躁的防衛の典型的な特徴で、内的な痛みや混乱に対処するために、外界を思い通りに操ろうとする試みである。陽菜の場合、家族を失った喪失感や生活の困難といった耐え難い現実に対して、天気という自然現象すら支配できるという万能感で対抗しようとしているとも解釈できる。

陽菜は自分の内的な苦痛や不安と真に向き合うことを避け、代わりに「晴れビジネス」をすることで、外界への働きかけに没頭する。これが「内なる現実の人々を生きのまま仮死状態にしておく」ことに通じている。そして晴れ女としての力を得ることで、一時的には全能感を味わえるが、それは同時に生の世界から少しずつ離れていくプロセスでもあり、最終的に彼女が「消える」危険性へと発展していく。それは「君の名は。」で三葉が糸守町の消滅とともに亡くなったこととリンクする。そして両者に共通するのは自身の自我の喪失である。

陽菜は帆高に出会うまで、上記のように自分自身の中で死を意識していたように感じられる。しかしこのように陽菜が自分の秘密を語ったということは、陽菜自身が「消える」

危険性がある今、生きたいという思いが強くなり、それ故にどうにかしたいと帆高に打ち明けているように感じられる。

陽菜を助け出すには、前述の「君の名は。」で瀧が深く三葉の内面に入り込む中で三葉を救い出したように、帆高が陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出すことが必要不可欠である。ある意味、凧が帆高に陽菜の誕生日プレゼントに指輪（一般的に永遠の絆、約束の象徴）を提案したのは無意識に陽菜を救い出してほしいと思ったために発した言葉ようにも感じられる。

そのように帆高との深い交流を通じて陽菜自身が等身大の自分と向き合い、彼女の自我が形成されていくことが今後の陽菜の生き方には必要不可欠と考えられる。

警察の介入と逃避行

その後、陽菜の家に刑事と女性警官が訪れ、帆高がいないかと事情聴取される。そしてここに保護者がおらず、子ども達だけで生活しているのは問題だと指摘され、後日児童相談所の介入が入ることとなり、これまでの生活が大人達によって壊されることになってしまう。警官は父の象徴であり、超自我対象である。ある意味、彼らは帆高達にこれまでの夢の出来事から別れを告げ、現実と向き合えと言っているように感じられる。

しかし帆高達3人は逃避行をすることにするが、それも束の間であり、長くは続かなかった。

陽菜が消えるということ

その後、0時を過ぎて、陽菜が18歳の誕生日になった時に陽菜は透明になり、消えようとしている。それは自我を持たないために、大人になれず消失していくことを意味しているようにも感じられる。

この時点で、陽菜は自分自身が消失していく（いわば自我の消失）ことを受け入れようとしているように感じられる。一方で帆高はそのことを自分のことのように嘆き悲しみ、なんとかこの状況を避けようと必死にもがいている。その二人の様子が対照的である。陽菜は何か悟っているかのようであるが、帆高は嘆き悲しみ、必死にどうにかしようともがいている。しかしこの帆高の思いも陽菜も思いであり、帆高の思いは陽菜自身の受け入れられない（彼女の悟りの裏側にある悲しみ）感情の投影のように感じられる。

そして帆高はその陽菜の投影を受けとり、なんとかしようとしている。そこに帆高自身の心の成長が感じられる。この会話の中で帆高は、これまでになく、陽菜という存在が自分にとってかけがえのない存在であり、一緒に生活を築き上げていこうという強い主体性

を感じる。

そしてその後、帆高と陽菜が見た夢が非常に意義深い。帆高は夢の中で「この場所から出たくて、あの光に入りたくて」と言っていたように、帆高は、エディプス葛藤に押しつぶされ、今ある状況から逃げ出し、大人のように自立した生活を望むが、孤独や不安を抱え、主体的になれないでいた。そこで陽菜に出会い、愛すべき対象を見出し始めたが、夢が途中で終わってしまったということは、それはまだ道半ばということを意味しているのだろう。

ここから帆高が陽菜を助け出す話へと展開していくが、ここが『君の名は。』で三葉の住む糸守町が隕石の落下で消滅し、そのことを知った瀧が、三葉を救い出すために宮水神社の御神体へと一人で向かう展開と似ているものを感じる。

その後、刑事がそのホテルに乗り込み風は児童相談所に帆高は警察署に送られることになる。しかし帆高は警察署から逃げ出し、逃走劇を繰り広げていく。

警察の保護 そして 逃走の意味

警察は、先に述べたように父親の象徴の側面があり、警察の保護は、帆高自身がまだ大人になりきれておらず、未熟な存在であり、無力感を象徴しており、現実から目を背け必死に逃げようとする帆高に対して、警官たちは目覚めて向き合えと言っているようにも感じられる。それと同時に思春期におけるさまざまな喪失への無理解への怒りを象徴しているように感じられる。

一方で帆高にとって陽菜がいなくなるということは希望の光が失われたことを意味する。そしてそれはある意味、現実には立ち向かうための移行対象を失ってしまったことでもある。大人たちは、その喪失を全く理解できていない。それはライナスにとって唯一無二の大事な毛布が、ボロボロの汚らしい毛布としか思えないのと同じである。

だから必死に陽菜の姿を追い求める理由のわからない警察達は、自分達のルールをことごとく壊し、逃げていく帆高にただ怒りを感じ、彼らは自分の職務をすることに命をかけ、帆高を必死に捕まえようとする。そこに帆高と大人達、言うなれば子供と大人の心の断絶が生じているのである。

そうして帆高は警察の追手から逃れて陽菜が晴れ女になったという代々木の廃ビルへと向かっていく。そしてそこに辿り着いたときに待っていたのが須賀圭介である。

須賀圭介と対峙すること

ようやく辿り着いた帆高だが、そこに待ち構えていたのは、これまで東京での生活を援助してくれた須賀圭介であった。しかし須賀は帆高の思いを理解する子供側の立場ではなく、警察と同様に大人の立場で帆高に接していた。そこで帆高は須賀と対峙することになる。それは、これまで父親をはじめ、様々な大人達に抱いていた彼のエディプス葛藤の再演である。

須賀：帆高！

帆高：須賀さん？

須賀：探したぜ、帆高

帆高：え…どうして…。

須賀：お前、自分がなにやってるか分かってんのか？

怒った口調で言う須賀。帆高は怒鳴り返して言う

帆高：陽菜さんが消えたんです！

須賀：—————！

帆高：俺のせいなんです、俺が晴れ女なんてやらせたから

須賀：帆高、お前——。

帆高：今度は俺が助けないと……！

パトカーのサイレンが会話に割り込む。

帆高：行かなきゃ！

須賀：おい待てよ！（須賀が帆高の腕を掘む。）お前どこに!?

帆高：あそこから彼岸（ひがん）に行ける！

帆高は部屋の天井を指す。崩れてぽっかりと抜けた天井越しに、朱い鳥居が見えている。

須賀：お前、なに言って…

帆高：空にいるはずなんです！非常階段を伝ってあそこまで行けば！

帆高は前に出ようとするが、強く腕を引かれる。

須賀：帆 高！

帆高：助けなきゃ！

須賀：待てよ、空になんているわけねえだろ？

僕の腕を掴んだ須賀さんの力が強くなる。

帆高：離せ！

須賀：しっかりしろ！！

帆高は須賀にビンタされる

須賀：とにかく落ち着けよ、帆高。今すぐ警察に戻った方がいい。話せば分かってもらえるさ、お前は別に悪くねえんだから

腕を掴み、懇願するような口調で言う。

須賀：このまま逃げ続けたら、もう取り返しがつかなくなる？そのくらい分かるだろう？

（帆高の思い）この人がなにを言っているのか、僕には本気で分からなくなる。逃げる？逃げているのはどっちだ？見ないふりをしているのは誰だ？

須賀：（優しい口調で）心配すんなよ。俺も一緒に行ってやるからさ。二人で事情を話そうぜ、な？

そう言いながら、強引に帆高を出口に引っぱっていく。

帆高：離して！離してください！

須賀：落ちつけて言ってんだろ！

帆高：離せよっ！

帆高は思いきり、須賀の腕に噛みつく。

須賀：痛ーッ！てめえ！

帆高は腹を蹴られる。背中から壁にぶつかり、床に倒れ込む。

帆高：うぐ…！

目を開いたその場所に、拳銃があった。

以前、帆高が捨てた銃だ。彼はとっさにそれを掴み、銃口を須賀に向ける。

帆高：邪魔するなっ！

須賀は目を見開く。

須賀：帆高…？お前、そんなもん持って――。

帆高：陽菜さんのところに（帆高は目をつむる。）行かせてくれよ！！

ドンー！

重い発砲音が廃ビルに木霊する。天井にむけて帆高は銃の引き金を引いていた――。

【考察】

須賀が帆高の考えを子供っぽい幻想と切り捨て、帆高に現実に向き合い、なにか諦めさせようとする大人の発言ではあるが、まるで須賀自身に言い聞かせているようにも聞こえる。須賀にとっての現実とは、妻の死という喪失が受け入れられず、娘にも会えない、いわば前に進めない諦めの生活である。しかし帆高はそれに決して屈せず、殴られても怯まず、銃の引き金を引いてまで自分の意志を突き通そうとする。

それは以前のチンピラのような金髪の男性に陽菜がホテルに連れ込まれそうになったシーンで、彼が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまうが、陽菜を助けようと拳銃を発砲する出来事と反復する。

しかし今の帆高は、自我を持ち、本気で人を愛し、愛する人を守り、生きていこうとする青年へと成長したように感じられる。

帆高の強い意志は、最終的に須賀をも突き動かしたと考えられる。リーゼントの刑事に帆高が連行されそうになったとき、須賀は怒りを露わにし、刑事を突き飛ばし、帆高が陽菜を助け出そうとすることに手助けする。これは、帆高の決意に須賀が心を打たれたが故に手を貸した行動ととらえられる。

3) 陽菜を助け出すということ

このシーンで帆高が鳥居をくぐるシーンは「君の名は。」のある主人公の瀧が起こしたあのシーンを思い出す。

それは、三葉が暮らしていた糸守町が隕石の衝突で消滅してしまったことにショックを受けた瀧は三葉になった時の記憶の糸を辿り、宮水の御神体が奉られている「彼の地」に向かい、川を渡り、洞穴の中に入り、口神酒を飲み、夢をみる、そのシーンである。川を渡る前に瀧が「ここから先はあの世」と言った様に、瀧は三葉を生き返らせるために三途の川を渡り、黄泉の国に向かう思いで洞穴に向かったと以前このアニメをこの番組で取り上げたときに考察している。帆高は鳥居を指して「あそこから彼岸（ひがん）に行ける!」と言ったが、瀧と同じように帆高も黄泉の国にむかう思いで天に登り、陽菜を助け出そうとしたのだと考えられる。小説版でも新海誠は次のように述べている「雲の上のこの草原は、彼岸だ。僕らがいてはいけない世界だ。ここは死者の世界だ。」

そして帆高は天に昇り、陽菜を助けに行く

帆高：陽菜！

陽菜：帆高！

帆高：——陽菜、飛べ！

帆高：陽菜、会えた！ほんとうに会えた！

陽菜：帆高、帆高、帆高！

帆高：手を離さないで！

陽菜：うん！

帆高：陽菜、一緒に帰ろう！

陽菜：でも、私が戻ったら、また天気が——！

帆高：(怒鳴った口調で) もう いい！！

帆高は怒鳴る。陽菜が驚いた顔をする。

帆高：もういいよ！陽菜はもう、晴れ女なんかじゃない！

見開いた陽菜の瞳に、激く稲妻が明滅する。雷鳴に振動する雲間を抜け、僕たちは積乱雲の下をまっすぐに落ちていく。

帆高：もう二度と晴れなくなたっていい！

陽菜：青空よりも、俺は陽菜がいい！

帆高：天気なんて——狂ったままでいいんだ！

帆高：——自分のために願って、陽菜

陽菜：……うん！

【考察】

このシーンは帆高が天に昇って陽菜を助け出す場面だが、これまでの帆高とは異なり、強い意志を持った一人の青年として陽菜と向き合っている。ここでは帆高と陽菜の関係性に明確な変化が見られる。それまでは帆高が陽菜に守られ、導かれる立場であったが、このシーンでは逆に帆高が陽菜を導こうとしている。この変化は、警察に保護された帆高がパトカーの中で陽菜の実年齢が15歳、つまり自分より年下だと知る場面の伏線回収にもなっている。新海誠監督は意図的に、帆高の精神的成長と陽菜の年齢の明示のタイミングを関連付けて描いたと考えられる。

小説版において、新海誠は帆高のセリフとして「僕は決めている。他のことなんてどうだっていい。神さまにだって僕は逆らう。言うべきことはもう分かっている」という言葉を記している。これは天気の巫女が人柱となるという言い伝えへの反逆を示すものであ

り、帆高がこれまで従順に守ってきた価値観を打ち破る瞬間、すなわちエディプスコンプレックスとの対峙を表している。

帆高は陽菜への愛を通じて、既存の価値観を超え、新たな信念と主体性を獲得し、それを陽菜にも伝えようとしている。消滅の危機に瀕した陽菜に主体性を取り戻させ、救出しようとする帆高の行動は、『君の名は。』において瀧が口神酒を飲んで三葉と入れ替わり、糸守町の人々と三葉を救うために隕石落下当日に電波ジャックや変電所爆破を計画したことと通底している。

しかしここで一つ疑問点がある。それは現実からいなくなり、彼岸に行った陽菜を帆高が救い出すということは、喪失の否認であり、いわゆる躁的防衛なのではないだろうか？そこでエヴァンゲリオン 新劇場版：破（以下エヴァ破と略す）の最終場面と比較して考えてみたい。エヴァ破ではアスカが使徒に変わってしまったという喪失、そして綾波も使徒に飲み込まれるという耐え難い喪失の感情にシンジの心が受け止めきれず、妄想分裂ボジションの自己愛的世界に陥り、対象の喪失を完全に否認し、万能的な充足や歓喜の幻想にひたる躁的な心になっているように感じられる（躁的防衛）。上記のようにエヴァ破を扱った際に述べたと思う。そして天気の子における帆高の行動も、確かにエヴァ破のシンジのように躁的な心に突き動かされている。しかしエヴァ破との大きな違いは、帆高は陽菜が社会の人柱のような役回りで消滅していく生き方から救い出し、陽菜を生き返らせることで、彼女が社会の中で主体的に立ち振る舞っていくことを促している。そこには帆高のエディプスコンプレックスを乗り越え、社会で強く生きていこうという決意も感じられる。